英語学習者の自律学習支援

はじめに

「グローバル社会でリーダー的役割を果たす有為な人材を育てる」という本学経営学部の教育目標を達成するためには学生に高度な英語能力を身に付けさせる必要がある。一方で、真に「使える」英語を習得させるためには受け身の体制で授業に出席させるだけでは不十分であり、学生が学習方法やリソースについて知り、英語学習を生活の一部に取り入れ、生涯にわたって自律的に学習できるように指導し、環境を整えていく必要がある。そこで本稿第一部では、英語学習者の自律学習支援の必要性について論じた上で、自律学習を支援するためのセルフアクセスセンターの導入例と課題について述べる。さらに、セルフアクセスの状況変化と今後必要となる対応について検討し、本学部セルフアクセスセンター導入への提案をする。第二部では本学部英語教員が主体となって2015年度から2016年度にわたって実施・運営をした、課外で自主的に英語の勉強をしたい学生に対して自律学習の支援をする「英語自主学習プログラム」の実施状況や運営方法について紹介し、同プログラムのもたらした成果について報告した上で今後の課題について考察する。

第一部

英語学習者の自律支援に関する事例研究と今後の展望

白石　万紀子

1. 英語学習者の自律学習支援の必要性

グローバル社会で活躍できる人材を育てるというテーマが社会の要請であり、本学部も国際経営学部としてこの要請に応えるべく努力を進めているが、時代の変化は大学の設備システムや学部のカリキュラムのスピードをはるかに凌いでいるという事が感じられる。 筆者は2016年11月に日本全国の私大、国公立大を集めて行われた「大学の約束：トップメッセージフォーラム」に参加したが、この時の副題は「日本の未来は大学の強い決意に秘められている」であり、社会の大学に対する期待と要望が非常に強いことが感じられた。このフォーラムの基調講演に招かれた日産自動車取締役副会長、文部科学省中央教育審議会委員の志賀俊之氏(2016年時)は、次の様に述べている。

> 「国籍に関係なく経営をしているグローバル企業が日本でも増加しており、日産では全経営メンバーの50%が外国人であり、本社執行役員以上は38%、海外拠点では80%以上が外国人である。当然社内の文書は共通語である英語になり、会議も英語で行われることが多くなる。日本人は正解だけを覚える教育の弊害で、正解である自信がないと手を挙げない。会議では聞き役に、仕事では脇役になる。大学では正解を覚えるのではなく、なぜそうなるのかを考え、自分で判断し、自分の意見を持ち、議論できる人間を育てて欲しい。」（日経新聞社主催『大学の約束：トップメッセージフォーラム2016』基調講演１より）

こうしたグローバル化は一部の企業に限られるという時代が過ぎ去ったことを認めない教育関係者は少ないであろう。社会、学生や保護者の要望に迅速に応えない教育機関は淘汰の憂き目を見ることは明らかである。

翻って本学部の英語教育は、卒業までに「英語を使えるのは当然として、自分で判断し、議論できる学生」を育てられているのであろうか。ここで大きな問題が二つ浮かび上がる。一つ目は英語力という観点だけから見ても、入学時の英語力が大きく二分化している事である。私大の中でも難易度が高いとされる本学の英語入試問題を受験して合格を得た約半数の学生（上級、中級レベルに相当）と、英語入試問題を受験せずに入学した残り半数の学生である（初級、基礎レベルに相当）。前者があと少しの努力で社会の求める英語力レベルに達成することが可能であるのに対して、後者の入学時英語レベルは高校レベルにすら達しておらず、自習、自律学習の習慣もないことが多い。二つ目は一年次の必修英語の履修後に開かれている選択科目の英語を二年次以降で履修する学生が非常に少ないという事である。このため大半の学生が一年次で英語学習を終了してしまい、残り三年間に英語を継続して学習する学生が少ないことが問題である。カリキュラム上は適切に英語科目を履修したとしても、英語は知識である以上に言語なので使用を停止してしまうと、当然ながら卒業時に「英語を使える」状態になって社会に出ていくことができない。

しかしながら、大学は入学してから四年間の学生教育に責任を持つのであるから、卒業時の英語レベルの低さを入学時英語力に帰して手を拱いているわけにはいかない。国際経営学科である以上、社会で通用するレベルの英語力を全学生の卒業時に保証することを目標として掲げ、学部全体で努力できないだろうか。

入学時に初学者レベルの英語力であっても、それからの四年間で、社会で通用するレベルの英語力に達することは、時間的な観点からだけ言えば十分可能である。しかし、授業時間だけでは英語を使う時間が圧倒的に不足していることは明らかである。英語は使うための言語であり、確かに文法・単語等の知識も必要だが、教科科目として完璧な暗記を問う意味はあまりない。内容を読み、聞いて理解し、意見をまとめて書き、自分の意見を言う、相手の意見に対応した発言をする、など不完全ながらも英語は「使う」ことでのみ

上達できるのであるから､「使う」時間を大幅に増やさない限りコミュニケーション能力を付けることはできない。この「英語使用時間の圧倒的な不足」という大きな問題を解決し、入学時の英語レベルから卒業時目標レベルまで引き上げることができる唯一の方法が自律学習支援、つまり自分の学習内容や方法、目標設定や計画を自己管理する自律学習への支援なのである。大学も英語を「教養科目」として一度提供して終わりとするのではなく、常に使い続けることによりグローバル社会で通用する英語力を高め続けさせる方策を考える、というように発想を転換させる必要がある。

英語の自律学習支援のための設備が一か所に集められていて、英語の勉強の仕方や各種教材、PC、その使い方や学習上の問題について相談できるアドバイザーなどが常駐する理想的な自律学習環境を英語教育分野ではセルフアクセスセンターと呼んでいる。残念ながら本学部にはその施設がない。ごく限られた教材が用意されたLL準備室、会話練習のできるイングリッシュラウンジ、洋書、英語雑誌のある図書館、授業で使っていない時にのみ自習に利用できるLL教室などが点在している現状で、学生にとっては非常に使い辛い環境になっており、学習計画を立てる相談に対応してくれる英語専門のラーニングアドバイザーもいない。こうした状況を少しでも改善しようと、本学部では2015年度から英語専任教員全員で学生を分担して受け持ち、年間を通して空き時間を利用して個別相談に対応し、自習関連の指導もしているが(本研究後半部分で紹介)決してまだ十分とは言えない状況である。学生に社会で通用するレベルの英語力を保証するために、早急に充実したセルフアクセスセンターの設置が望まれる。

2. セルフアクセスセンター：導入例と課題

2.1　日本の大学におけるセルフアクセスセンター

欧米の大学においては「スタディースキルセンター」､「セルフアクセスセンター」等の呼称で大学生の学習を支援する施設が早い時期から広く取り入れられており、日本の大学では語学教育支援を中心とした施設がいくつかの大学で1980年代から導入され始めた。現在の様な「セルフアクセスセンター」

(Self-Access Learning Center)としての広範囲なサポート施設は2000年以降に研究と導入が進められ、比較的その歴史は浅い。こうしたセルフアクセスセンター設立の動きと呼応して、語学を中心とした自律学習支援の研究学会としてJASAL(The Japan Association of Self-Access Learning)が2005年に設立され学生サポートの様々な研究が行われている。次に日本でかなり早い時期に本格的なセルフアクセスセンターを導入した代表的な例として創価大学と神田外国語大学の具体的な事例を検討したい。

2.2 創価大学ワールドランゲージセンター

創価大学は2012年度に文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」(事業期間5年)、2014年度に「スーパーグローバル大学創成支援」(事業期間10年)の双方の事業に選択され、「創造的世界市民の育成」を目指して様々な取り組みを行っている。語学教育という観点からの現在までの達成度は、次の3点から見ることができる。

① キャンパスのグローバル化と多様な学生の確保(総学生数約8000人)

外国人留学生を全学生の15%に拡大する目標

外国人留学数　2013年 313人→2016年600人

単位を伴う海外派遣日本人学生数　2013年 557人→2016年 868人

外国人学生入試ウェブ出願システムの導入

② 学部大学院プログラムの国際化

語学力基準(TOEFL iBT 80, PBT 550相当以上　達成学生数)

2013年296人→2016年700人

外国語による授業　2013年3.3%→2016年10%

外国語で卒業可能なコース　2013年1コース→2016年4コース

③ 教職員の国際化

外国籍の教員、外国の大学で学位を取得または外国で通算1年以上の教育・研究歴のある日本人教員　2013年43.3%→2016年48.7%

外国籍の職員、外国の大学で学位を取得または外国で通算1年以

上の職務・研修経験のある日本人職員　2013年2.4%→2016年6.7%

以上の様なグローバル化の具体的な支援として創価大学は1999年に
ワールドランゲーセンターというセルフアクセスセンターを設置した。
英語科目のみならず、英語による専門科目や留学、国際交流、留学生教育の支援としてワールドランゲージセンターは次の9つのプログラム（含む施設）が展開されている。

① Chit Chat Club

まだ英語に自信のない初級者レベルの学生を対象に英語のみの環境で日常的な英会話を楽しむプログラム。
対象レベル　TOEIC 420以下　TOEFL 427以下
スタッフ1名が4～5名の学生を担当
オンライン予約により10:45～18:05の間で1回45分間

② English Forum

身近な話題から社会問題や国際問題までを世界中からの留学生や留学経験のある日本人学生とディスカッションするプログラム。
対象レベル TOEIC 400以上　TOEFL 430以上
スタッフ1名に学生10名
オンライン予約により1日3回開催、1回60分

③ Writing Center

学術的な英文指導や授業課題のエッセーなど英文の書き方の指導を行う。
スタッフ1名につき学生1名の個別指導
日本語による相談も可能
オンライン予約により1回30分

④　Global Village

中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、韓国語、モンゴル語、トルコ語、ポルトガル語、ロシア語、ヒンディー語、スペイン語、等を使い、世界中からの留学生とコミュニケーションすることにより言語や文化を楽しく学ぶプログラム。

対象　語学レベルは不問

デジタルサイネージ(オンライン申込みシステム)に掲載された曜日毎に組まれたスケジュールに申込み

1テーブル4名　16:35～18:05

⑤　iBT Speaking Center

TOEFL iBT（internet based test）のスピーキングテストに向けて練習するプログラム。回答についてインストラクターがフィードバックし、メモの取り方や考えの整理の仕方についてのアドバイスを受けることもできる。

オンライン予約により1回20分

⑥　English Consultation Room

英語の自主学習に関するアドバイスを行う。英語学習の方法やメディアや施設の使い方、目標設定や学習計画の立て方などを紹介する。

オンライン予約により1回30分

トレーニングを受けたアドバイザーが担当

⑦　CALL Room

語学ソフトウェアがインストールされたパソコンとマイク付きヘッドセットを使って自習を行うための施設。授業の予習・復習やTOEIC対策の他、英会話、発音練習を快適にのびのびと行うことができる。

⑧　Reading Area

語学関係の書籍やCD・DVDを使用して自習できる場所。
語学関係の書籍、教材、語学試験教材、Graded Readersという難易度別の多読教材、新聞を利用できる。
ビデオブースではCNNを視聴できる。

⑨　Nihongo Dojo

留学生が日本人学生と日本語を練習できる場所。
対象　どのレベルでも可
1名のスタッフが4～6名の留学生を担当
毎日14:50～18:05の間に1回45分

この様な大規模かつ多様なプログラムを運営するために、留学生と留学経験のある日本人学生がスタッフとして参加していることがこのセルフアクセスセンターの大きな特徴である。先に挙げた「キャンパスのグローバル化」があってこそ実現可能な環境であるが、日本人同士であっても先輩が後輩にアドバイスするという環境は学生同士が共に学び合える良い機会でもあろう。

プログラムの一つであるEnglish Forum については、学生が留学生や留学経験のある学生と英語で社会問題等をディスカッションすることを通して視野を広げ、自分の考えを深めることができていると報告されている(Chirnside、2016)。しかしこうした有意義な結果をもたらすプログラムであってもChirnsideによれば、始めから自発的に参加する学生は少ないとのことである。調査では通常の英語科目の授業の中で一学期間に７回以上English Forumに参加することを義務付け、その結果最終成績の5%を与えるという取り組みが報告されている。ただし、最初は義務的に参加していた学生も実際は多くの学生が７回以上参加しているという結果が得られた。自律学習に適した環境を用意したとしても、最初から学生に自律学習の習慣を期待できないということが解る。授業との連携により自律学習への道筋をつけるという試みが参考になる。教員の自律学習への関与を段階的に減らし、

ある程度の時間をかけて完全な自律学習者を育てるという姿勢が大切だと考えられる。

English consultation room は2006年に設置され、当初は年間のべ106名の利用者だったが、2007年には370名、2010年には700名と利用者が増加したため、2011年より専任アドバイザー1名、学生アドバイザー2名、さらに語学担当教員が3名アドバイザーとして担当している。個別の相談内容の他に、共通した質問も多いことから、「How to Study Flyers」（英語学習法リーフレット）を作成し、リスニング、スピーキング、TOEFL対策など12種類のトピックについて勉強法の例と教材例を掲載し学内の数か所に設置しているが、中でも需要が高いのがTOEFL, TOEICなど資格試験に関するものやスピーキング、リスニングの練習方法に関するものである。これは創価大学のプレイスメントテストにTOEICが使用され、留学の選考にTOEFL iBTが使用されることと関連している（石川、2012）。

創価大学では香港理科大学等を中心としたプロジェクトチームが開発したVELA（Virtual English Language Adviser）を参考にして、自主学習サポートのためのツール「語学ポートフォリオ」を開発した。石川（2012）によると、English Consultation Roomで収容しきれない多くの学生に１対１のアドバイスを行うことや、長期休暇期間などに遠隔のアドバイスを継続的に行うことを念頭にコメント入力をメイン機能として盛り込んだということである。「語学ポートフォリオ」の機能は以下の通りである。

① 学期、月間、週間目標の記入

② プレイスメントテスト、TOEFL, TOEICなどのスコア情報一覧

③ 目標に合った推薦教材と学習方法の一覧と設定
習熟度別と10の目的別に分類された100種類の教材から学生が選択し設定する。

これらは学内のセルフアクセスで入手あるいは利用可能なものであるが、それ以外の教材を「My教材」として登録することも可能である。

④　コメント入力

学生が自分で設定した教材と学習法を一定期間実施し、学習時間と達成度、振り返りを自分で入力する。担当アドバイザーは学生のコメントを確認し、フィードバックやアドバイスを入力する。

⑤　学習記録の蓄積

月間、週間の学習時間は折れ線グラフで表示され、学習を終了した教材は「これまで学習したマテリアル」としてコメント付きで記録でき、いつでも閲覧することができる。

石川(2012)によると、これまでできなかった1対1の継続的できめ細やかな支援が電子ステムの活用によって可能になり、より多くの学生に豊富なコンテンツの提供と継続的なフィードバックの送信が可能になったということである。石川は、授業時間外で少ない時間でも自主学習に取り組むことがTOEIC等のスコアアップに確実につながること、またオンラインの語学ポートフォリオ上での学習進捗報告を通してアドバイザーとのやりとりがあることが、学習継続への意識づけや動機づけに寄与していると総括している。

2.3. 神田外国語大学セルフアクセスラーニングセンター(SALC)

神田外国語大学は学生総数約3800名の外国語学部1学部からなる大学である。2012年度に文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」(タイプB:特色型)に採択され、グローバル人材の育成に向けての取り組みを進めている。採択の審査対象となった具体的施策のうち語学教育の観点から次の6点に着目する。

① 英語教育の改善
1年次英語必修授業を20名以下で編成し、ほぼ全てを英語のみで授業を展開し、プレゼンテーション、グループワークの機会を増やす。またSALC（Self-Access Learning Center）を利用した個別ニーズに合った自律学習と組み合わせて授業を行っている。

② 留学生と日本人学生が共に学ぶJapanese Studies Program（英語で行う日本事情科目群）の設置
英語で日本を学び発信できる「世界スタンダード」の授業の充実を目指している。

③ 留学に向けた自律学習プログラム（Study abroad module at SALC）を開発

④ アジア圏での英語留学を開始
英語での授業を展開しているマレーシア、シンガポール、フィリピンなどの大学と新たに大学間協定を締結し「英語で学ぶ」機会を拡充する。

⑤ 教職員のグローバル化に向けたプロフェッショナル・デペロプメント活動の強化

以上の様な取り組みの支援策として神田外国語大学はセルフアクセスセンターSALC（Self-Access Learning Center）を2001年に設置した。本稿の共同研究者全員で実際にSALCを訪問した際、その広さと施設面、運営面での充実ぶりに驚かされたことを記憶している。施設面では次に挙げる特徴がある。

① Edutainment Booth
海外の映像コンテンツ、14か国17チャンネルを衛星放送で受信しており、2名同時利用できる個別ブースが7つ設置されている。

② Writing PC area
レポートやエッセー等の課題に取り組むエリア。レポートの書き方を教えてくれるソフトも完備され、インターネットも使用できるので海外の英文を参考にすることもできる。半開放型の個別ブースが7つ設置されている。

③ Group Access Area
4〜5人一緒にディスカッションしたり、勉強できる比較的大きなテーブルと椅子が9つ設置されている。

④ Reading Lounge
難易度別の多読教材「graded readers」の他、多様な英語書籍が揃う。一人用の椅子やソファが8つ設置されている。

⑤ Speaking Booths
ガラス張りの防音仕様の個室に発音を学ぶソフトが準備され、人に聞かれることなく快適に発音練習ができるブースが6つ設置されている。

⑥ Individual Study Area
仕切りのある自習用のPC付き個別デスクが16設置され、インターネットやDVDなどを自由に使用することができる。

⑦ Multi Purpose Rooms
グループでディスカッションしたり、課題に取り組む環境としてTV、PC、DVDプレーヤー、ホワイトボードを完備したガラス張り会議室が8室設置。

この他SALCの広大なスペースの様々な場所には18種類の教材（注）が配置してあり、学生への貸し出しも行っている。

施設運用面での特徴は以下の通りである。

① Learning Advisors
海外の大学院で語学教育を専門に学んだ10人の専任アドバイザーが所属し、常駐している。学生個人のニーズに合わせて最適な学習法を一緒に考える。

② Module
学生に合った学習プログラムを組み立てる手助けをする独自教材。自分の弱点を見つけることから初めて自分に合った場所や時間を自分で選んで学習を進める8週間完結型の自習パック。

③ ELIラウンジ
外国人教員が常駐し、誰でも英語でのコミュニケーションを楽しむことのできるラウンジ。

④ Practice Center
外国人教員の空き時間を予約し、個別に会話ができるシステム。

⑤ Writing Center
授業の課題やレポートなど自分が書いた英文に対し、外国人教員からアドバイスをもらえるシステム。

⑥ Event
新入生歓迎パーティー、ハロウィン、クリスマスなど季節ごとに様々なイベントを開催している。

神田外国語大学のセルフアクセスセンターの取り組みの中で特徴的な点が二つある。一つ目は英語教育分野でのかなり強力な研究基盤が確立しており、

その研究成果が常にセルフアクセスセンターの発展に取り入れられているという点である。学部学科に所属する教員の他に言語教育研究所に10名、別組織のEnglish Language Instituteに多くの専任教員が所属しており、教育と活発な研究に携わっている。二つ目はSALCの教育活動や運営を支えるスタッフが充実しているという点である。English Language Instituteだけでも英語教育の学位を持つ70名以上の外国人教員が語学専任講師として所属しており、教材作成、プログラム運営、学生指導などSALCの様々な活動に関与して学生のサポートに取り組んでいるという点である。SALCの運営にあたるスタッフ構成はディレクター1名、専任管理スタッフ4名、専任デザイナー2名、専任ラーニングアドバイザー9名と約35名の学生アルバイトスタッフである。本稿の共同研究者全員がSALCを訪れた際に、学生アルバイトスタッフがカウンター業務を引き受け、てきぱきと英語で学生に施設使用について説明する様子が印象的であった。

神田外国語大学のセルフアクセスセンターSALCの設立当初からの大きな理念は学生が授業外で英語を使い学ぶ機会を提供し、学生の自律学習の発展を促進するための支援を行うということである。この学習者の自律（learner autonomy）は英語教育の分野で研究が進んでいるが、SALCにおいても様々な研究が発表されている。その研究結果を踏まえて2013年に神田外国語大学の一年次必修英語科目Basic English Proficiency Programとの連携が見直され、新しい形のIndependent Learning Component of Basic English Proficiency Programが開始された。

Hutchinson（2014）の研究はこのComponentについて次のようにまとめている。それまでのComponentでは学習者が自分のスキルの弱点を分析して弱点補強のための教材や勉強法を選ぶ際、学習者の自律を阻害しないように教員側からのガイダンスをあまり与えず、学習後の面接において教員と自習の成否についてディスカッションするという形であった。しかし一年次学生に自分の英語力分析と教材や学習方法選びをする十分な力が備わっていないことから自習自体が成功せず、また授業評価に自習が組み込まれていないこと

から学生も教員も自習にあまり熱心に取り組まなかったという結果が明らかになった。

こうした結果を踏まえて、新しいIndependent Learning Componentでは最初から学生に自律的行動を期待するのをやめて、目標設定や振り返り、学習方法の選択に関して情報を十分に与えながら徐々に独立した学習者になる手助けを教員が行うという方法に転換した。新しいComponentではまずlearning strategies, learning style, など学習方法に関する自己分析を学生が行い、同時に教員がそれに即したいくつかの学習教材と学習方法を推薦し、学生が目標やアクティビティを決定し、場合によっては教員がその修正を促すといものである。こうして一度決めた学生の個々のニーズに合ったComponent は学期内に何度も振り返られ、教員の助けを受けながら修正される。重要な点はこのComponentが必修授業の成績の10%を構成するという取り決めである。これにより教員も学生も学期末まで中途放棄することなく自習が続けられる。Hutchinson（2014）はこのComponentの一例を次のように示している。

必修英語科目への自習コンポーネントの組み込み例

1．授業内で教員のガイダンスを受けながら、自己分析アクティビティを通して自分の英語力の中でスピーキングに問題があると分析。

2．学生が自分のスピーキングの録音を自己分析し、教員のフィードバックと合わせて学習目標を「発音、文法、ボキャブラリー、ディスカッションスキル」のリストの中から設定。

3．同じ目標の学生同士でグループを組み、SALCに行ってラーニングアドバイザーにどの様なアクティビティや教材があるのかを教えてもらい、学習計画を立てる。

４．学習計画は定期的に授業内で振り返る。また教員は学期中に少なくとも２回は個別に面談し学習進捗状況をディスカッションする。

Hutchinsonは、ほとんどの学生がこのComponentの終了後、英語力が上がったと感じ、授業外での利用可能な教材や勉強法を適切に評価できるようになり、教員側も学生のニーズや要望を知り教員の学生への関与に役立てることができるようになったと評価している。また、特に習熟度の低い学生向けには学生に教材や学習方法の選択を任すのではなく、あらかじめ教員が選んだ教材や学習方法のセットを作り学生が選ぶ形の‘strong model’も場合によっては必要であると結論付けている。

先に述べたように神田外国語大学では英語教育全般において研究活動が盛んであるが、SALCにおいても常に評価・分析・改善が組織的に行われている点が特徴的である。この評価活動について、言語教育研究所に所属し、SALCのディレクターでもあるMynard（2016）はStrategic PlanningとOngoing Research Cyclesの二つに分けて説明している。

Strategic Planning においてはすべてのSALC専任スタッフが定期的にSALCのミッションとビジョンを確認し、必要であれば改善する。ミッションステートメントに注意を向けることにより、SALCの軌道が重要な価値観と主要なサービスから逸脱することを防ぐ。またビジョンステートメントの確認は将来の発展をイメージし、グローバル社会の動向や技術革新を念頭に入れ、理想的なSALCの将来像を描く助けになる。Strategic planningにおいては約３年から４年の期間ごとに重点目標を設定し、ゴールとサブゴール、具体策、優先順位付け、タイムフレームの策定を行い、実施後には達成度を検証する。例えば2016年から2026年の５つの重点目標は以下の通りである。

１．学生のlearner autonomyを発展させる機会を提供する。
２．学生のニーズに合わせた適切な学習環境とリソースを提供する。
３．学生が複数の学習コミュニティーに参加できるようにし、学生の学

習意欲を促進する。

4．学生の現在と将来の目標に関連した英語習熟度を増加させる。

5．他の教員と協力してプロフェッショナル・デペロプメントを継続する。

MynardはStrategic Planning はSALCの俯瞰的評価として有意義であり各学期の達成を確認することで達成感も得られるが、それに加えて学外の、例えば他のセルフアクセスセンターの専門家に評価してもらい、将来の計画に参加してもらうことができれば尚有意義であると述べている。

SALCのもう一つの評価活動は項目ごとのOngoing Research Cyclesである。これはSALCの活動を詳細にわたって組織的に調査分析するもので、サービス、施設、イベント等が定期的に調査される。この調査研究はあくまでも学生のニーズに合ったサービスを行うことが目的であるため、どのプロジェクトも「学生のニーズは何か？」と「何が学生をサポートする最良の方法か？」が問われる。このため最も頻繁に立てられるresearch questionは「このサービス（施設、イベント）はどのくらい適切に学生のニーズに応えているか？」と「さらに改善するためにはどうしたら良いか？」の二つである。研究方法としては複数のデータ収集方法が組み合わせて用いられる。一般的には文献調査、観察、利用回数調査、テーマ別グループディスカッション、質問紙等であり、さらに談話分析、学習者の記録分析、学習者のポートフォリオ分析、学生やスタッフへの面接等が加えられる場合もある。こうした調査は通常かなりの時間を要するものであることと、項目によってかたよりを防ぐために、Course, Advising, Resources, Curriculum, Student staff, Workshops, Technology, Space use のそれぞれについて一定の調査年を設けて定期的に調査スケジュールを立てている。Mynardはこうした調査分析が単なる同じことの繰り返しに陥らないように、またプログラムを常に改良しイノベーションを取り入れるためにもStrategic Planning の中のミッションステートメントとビジョンステートメントを定期的に確認して‘big picture’の視点を忘れないようにする必要があると強調している。

この様な継続的な調査・研究はセルフアクセスセンターが効果的に学生の自律学習を支援するために欠かせないと考えられる。グローバル化や技術革新が加速する現代社会において、世界情勢や技術革新などの動向を常に取り入れながら、社会に貢献できる英語習得のためにタイムリーに改善を重ねていく必要がある。

3. セルフアクセスの状況変化と今後の対応

先に述べた様に、セルフアクセスセンターは日本では2000年頃から大学への導入が本格化したが、最初の、どの様な設備、備品、教材を組み合わせるかという段階から現在に至るまで、研究もセンターの内容もかなり変化してきている。Mynard（2016）はこうした変化を三つに分けて論じている。

第一の変化：センターの「場所」としての存在意義

数年前と比べて学生が無数のオンライン、デジタル教材にアクセスすることが格段に容易になった。こうした技術の変化のため、学生は必ずしもセルフアクセスセンターに足を運ばなくても英語を学習できるようになった。こうした時代にセルフアクセスセンターは必要なのだろうか。Mynard（2016）はこの変化に対し、SALCは‘social hubs’として機能すると述べている。多くの研究から、SALCに来て他の学生と協同学習をする事が英語を使い続ける有意な動機になることが明らかになっている。

他の学生や教員と関わり合って学習する意義や効果については、英語が単に教科、科目ではなく、コミュニケーションのツールである点から明らかであろう。使えば使うほど上達する、という考えからすれば、本学においても「どの習熟度の学生も気楽に英語のコミュニケーションを楽しめる場」としてのセルフアクセスセンター、特に英語に限らずコミュニケーションのあまり得意でない学生にとっての「学習を伴った居場所」としてのセルフアクセスセンターの意義は非常に大きいと感じる。

第二の変化：オンライン自習教材の普及
以前の英語教育といえば、学校、大学、語学学校等の教室内学習にほぼ限られ、他の手段としては書籍や録音教材等で自習することが大半であった。現在では画像を見て学習できるプログラムとしてMOOC（Massive Open Online Course）や多数のスマートフォンアプリケーションなどがある。この状況においてセルフアクセスセンターは必要であろうか。Mynard（2016）はこの変化に対し、語学学習においては学習者の感情、情動が大きな影響を及ぼすため、独習する際に肯定的なフィードバックを自分に対して行うことが大切であり、セルフアクセスセンターではこうした情動面で自律学習のサポートを行う大切な役目があると述べている。

学生の英語習熟度が明確に二分化している本学の状況を見れば、始めから自習に興味があり取り組もうという意欲のある学生にはその「やる気」が挫折しないようにサポートし、習熟度が低く、自習の楽しさや方法のわからない学生にはきっかけを与え、自習を継続できるサポートを行い、中長期のプロセスを通じて自律学習者を育てるという大きな役割があると考えられる。

第三の変化：学習内容の変化と継続
世界は現在常に変化しており、大学時代に獲得した知識のみで社会に貢献し続けることは不可能になった。ヨーロッパでは21世紀のスキルとして常に学習を深め続けるための高次のスキルが必要であると提唱している。こうした時代の変化にセルフアクセスセンターはどの様に対応していけば良いのだろうか。Mynard（2016）はこの変化に対し、学び方を学び、生涯継続できる自律学習を推進する支援を行う必要があり、セルフアクセスセンターでは多様化する学習方法から学習者が適切に学び方を選んで最大の効果を上げることができる様に支援することが大切であると論じている。

一度獲得した知識や、現在高度に専門的であると認識されているスキルですら、数年後には陳腐化し、あるいは人工知能に置き換わる可能性も否定できない世の中において、大学はこれから社会に出ていく学生に対して一生涯使

える知識や技術を保証することはできない。ただ出来ることは学び方を教え、学び続ける方法を身に付けさせることであろう。セルフアクセスセンターにおいても、学生が自分の英語力を振り返り、何が必要か、どの様な学習方法や教材があるのかを理解し、目標と計画を立て、それを実行する手立てを考え、実行状況を自己管理し、目標達成のために学習意欲を自己管理する、といったプロセスにおいてきめ細かいサポートをすることは学生の成長に大変有意義な事である。

4. 本学部セルフアクセスセンター導入への提案

本稿１で述べた様に、本学部に入学した学生に４年間の学習期間を経て卒業時にグローバル社会で通用する英語力を保証するには、授業以外での「英語利用時間」を確保するためのセルフアクセスセンターが不可欠である。セルフアクセスセンターの導入に当たっては単に一か所に設備をそろえるだけでは十分に機能しないことが過去の導入事例から明らかになっている。既にセルフアクセスセンターを導入している大学の事例研究では多くの大学で、センターに足を踏み入れることのできない習熟度の低い学生の問題が共通して指摘されており、セルフアクセスセンターに足を運ばせる様々な工夫が必要である。

施設運営という観点では専任運営スタッフ、専任学習アドバイザー、多くの学生スタッフをまとめるシステム、個々の学生の学習をサポートする電子ポーフォリオシステムの導入という例が本学部にも参考になろう。

また学習面では二分化する学生層にむけた対応が必要である。習熟度の低いグループには必修英語授業にセルフアクセスセンターでの自律学習を組み入れるin class-out of class 連携型の学習や、あらかじめセルフアクセスセンターや自宅でオンライン教材を学習してから反転学習を教室内で行うFlipped Classroom型学習を提案したい。習熟度の高い英語受験入学の半数の学生向けには、専門を英語で学び、そのサポートをセルフアクセスセンターで行うCLIL（Content and Language Integrated Learning）型（Percival,

2013）や、TOEFL やTOEICに向けた勉強のサポート、MOOC（Massive Open Online Course）の利用とその学習サポート等をセルフアクセスセンターで行うことも考えられよう。

これに加え、セルフアクセスセンターがどの様に学生の自律学習支援を行えるかについて継続的な終わりなき研究が不可欠である。単に設備や教材を与えるのではなく、教員や学習アドバイザーが学生に寄り添って「自分もグローバル社会に貢献できるのだ」という希望と目標を持たせ、学習意欲を育てていく丁寧な支援が何よりも重要であることを強調したい。

昨年筆者がロンドンを訪れた際、数年前よりも格段に多くの英語を母語としない移民によって、あらゆる生活やビジネスが活発に営まれているのを感じた。一日中耳にする英語は文法も発音も完璧な英語とはかけ離れたものが多いが、それでも全く支障なくやり取りが行われ日常が営まれていく。グローバル化の時代には、辞書的に完全な「学校英語」を身に着けるまで使わないと構えるのではなく、不完全な英語で良いから積極的にコミュニケーションをとる姿勢を持たないと、日本人だけがグローバル化の流れに取り残されるのだと感じ、同時に英語教育に携わる者の意識改革も大切だと痛感した。

（注）ここで取り揃えられている教材は次の18分野である。
Media English, Study Abroad, Countries and Cultures, Japanese, Hobbies and Interests, Group Activities, Learning with Movies, Examination, Writing, Movies, Business English, Presentation, Reading, Listening, Speaking, Learn How to Learn, Vocabulary, Grammar

参考文献

Chrinside, A. Learning Awareness from Self-Access Chat Sessions. Presentation in JALT 2016, Nagoya, November.

Hutchinson, C.（2014）Redesigning an Independent Learning Course Component: Recognizing the Role of Instructor as Guide. Studies in Self-Access Learning Journal, 5（4）, 389-393.

石川由紀子（2012）「語学ポートフォリオを活用した英語自主学習支援の取り組み報告」創価大学学士過程教育機構研究誌, 1, 153-163.

Mynard, J.（2016a）. Looking Backwards and Forwards: evaluating a 15-Year-Old SALC for Continued Growth. Studies in Self-Access Learning Journal, 7（4）, 427-436.

Mynard, J.（2016b）. Self-Access in Japan: Introduction. Studies in Self-Access Learning Journal, 7（4）, 331-340.

Percival, S.（2013）. Learning through in-house videos: how one Japanese college integrates subject content in its EPA program. Asian EFL Journal, Curriculum Contexts, 15（4）, 324-329.

志賀俊之（2016）基調講演1「どう育てる " 世界基準人材 " 」大学の約束：トップメッセージフォーラム2016―日本の未来は大学の強い決意に秘められている―　日経新聞社主催、11月